

埋蔵文化財 愛知

No. 39



門間沼遺跡出土の琴(葉栗郡木曽川町)

門間沼遺跡94C区を東西にはしる古墳時代後期(5C末~6C初め)の溝から出土した。写真手前にくし齒状に見える部分が弦をかける突起。反対側は欠損している。長さ40cm、幅12cmで材質はスギである。

中世の食文化 ―― 出土遺物の分析から ――

昔の食生活を再現するためには、何を食べていたか、どのような形で食事をしていたかという2つの問題を調べる必要がある。すなわち、食物遺体から食生活内容を、使用された道具から食生活様式を追求する2つの方法が認められよう。愛知県における中世の食文化を考えるにあたり、食物遺体の分析はあまりないため、食生活に使用された道具を題材にして迫ってみたい。

檜崎彰一氏は「壺」・「甕」・「播鉢」の大量生産が中世窯業生産の特質であると述べた（『日本の陶磁第2巻』1975）。これは、貯蔵具・調理具の普及として言い換えることができよう。更に調理具については、中世の間でも大きな変化を迎えている。一方、食膳具は「杯」から「椀」・「皿」の形に変わるものの、一人一人が個人用の器を使う形式は古代から変化していないようである。具体的に食器の変遷を見てみよう。

中世前期の食器

愛知県における中世前期（鎌倉時代～室町時代前半）の主な出土遺物には、陶器の「椀」・「皿」等の食膳具と、陶器の「壺」・「甕」・木製の「曲物」等の貯蔵具と、陶器の「こね鉢」・土器の「甕」等の調理具がある。陶器の「椀」・「皿」は最も多く出土する遺物で、数え方にもよるが、「椀」1個に対し「皿」1個という割合でどの遺跡からも出土している。

「こね鉢」は体部が逆「ハ」の字状に開く古代にはあまり見られない形で、内面に播り目（複数の凹線）がまだ存在しない。土器の「甕」には「伊勢型鍋」と呼ばれるものがある。古代の甕に比べ扁平な形状をしているものの、体部の上方が「く」の字状に屈曲している点を見れば、この「伊勢型鍋」も「甕」と考えられる。おそらく煮炊・煮沸をこのひとつの道具で行ったと思われる。

中世の食器にはもう一つ特別な品物がある。特定の遺跡や地点でしか出土しない土器の皿「かわらけ」である。灯明皿と呼ばれることがあるが、中世では灯明の痕跡が残らない場合が多く、食器の一つと考えられる。完形で大量に出土する場合もあることから、身分の高い人々が饗宴に用いたものと推定されている。

中世後期の食器

こうした中世前期の食器様式が、大きく変化するのは15世紀後半に入ってからのことである。この中世後期（戦国時代）の時期は、遺物・遺構・遺跡のあらゆる事象で劇的な変化が見られる。食器においては「播鉢」の普及や「鍋」と「釜」の登場という画期的な変化が見られた。

食膳具は形態や材質が若干異なるものの、大きな変化は見られない。陶器の「椀」・「皿」は無釉の「山茶碗」から施釉陶器の「天目茶碗」などに変わり、木製の漆器は大小の「椀」がセットで出現する傾向が窺える。中世を通じて「椀」と「皿」はセットとなっており、おそらく、木製のお膳（折敷）上に「椀」と「皿」を乗せて食事をしたものと思われる。

鉢は「こね鉢」が減少し、内面に播り目を持つ「播鉢」が出土するようになる。中世前期の「こね鉢」は全出土土器類の5%以下の出土量であるのに対し、「播鉢」は20%前後を占め、増加している。しかもこの播鉢の内底面や口縁部の端部はよくすり減っており、内底面のすり減り方もパターンが認められる。下半分が均一にすり減っているものや、すり減った部分が波形になるもの等である。この他に播る道具には石製の「臼（挽臼・茶臼）」があり、中世後期以降によく見られる。一方、弥生時代から続いている「搗臼」と「竪杵」の出土例が少なくなっている。

土器の煮炊具は、中世後期になると「鍋」と「釜」のセットが出現する。「鍋」は体部が開き、土器を支えるための鐳や内耳が付いている。尾張では、ヘルメットを逆さまにしたような半球形の内耳鍋が普及し、三河では半球形の他に、口縁部が「く」の字に折れる内耳鍋が混在している。一方、「釜」は口縁部が直立する壺の形をしており、外耳や鐳が付いている。

「鍋」と「釜」は形の違いから、用途が異なっていたと思われる。「釜」は、口が狭められて熱効率が高い反面、中身の出し入れが難しいため、湯沸かしを主体とした使用法が考えられる。一方、「鍋」は口が開いているために個体の加熱に適している。こうした煮炊具の機能分化は中世前期の「伊勢型鍋」には見られない現象である。

更に、16世紀後半に至ると浅い「焙烙鍋」の出現によって煎るという機能分化が達成され、煮炊具の多様性はより一層加速されていくのである。

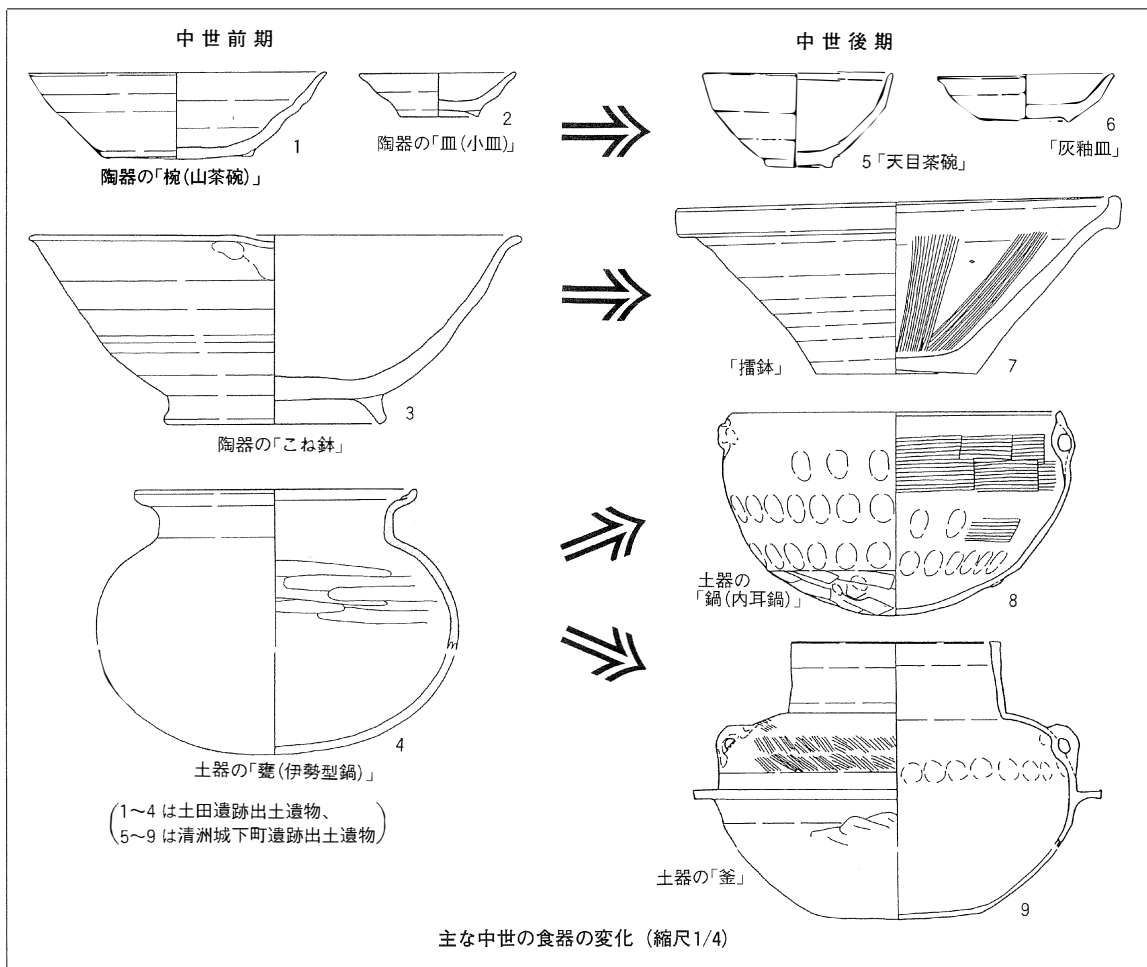
食生活の推定

このように見ていくと、中世の食事では個人個人の食器が用いられており、この点は古代から現代まで大きく変わらないのに対し、食物調理の場面では、古代には少なかった「播鉢」や「臼」という加工具が普及し、煮炊具も機能に合わせて多様化していることが窺える。こうした調理具の多様化という現象は、食生活のどのような変化をもたらしたものであろうか。

回転式の「挽臼」は、食物を細かく碎いて粉にする他、麦・稗・粟等の穀類を脱穀したものと思われる。一方、「こね鉢」・「播鉢」はゴマや味噌などの食物を細かく碎き

粉にする、または食物を混ぜ合わせる道具である。従って「播鉢」と「臼」の普及は、食物を粉にして混ぜる「粉食文化」の発展と言い換えられよう。おそらく、農業技術の発展に伴い二毛作や畑作が行われ、様々な穀物や食物が生産されるようになり、「米」以外の穀物類の調理方法の開発が必要となったのだろう。また「米」も効率よく玄米にする技術が進展したこともその一因と思われる。また煮炊具の機能分化も、食物の多様化に伴って起こった現象と思われる。湯沸かしと煮炊きの使い分けは、調理方法が多様化・洗練化されたことを物語っているだろう。

こうした中世（後期）の食様式は近世まで継続している。次第に豊かになる食文化の発展は、その後の時代の変動をもたらしていく大きな原動力となっているように思われてならない。（調査研究員 鈴木正貴）



◀ 遺跡紹介 ▶

大毛池田・沖遺跡

両遺跡は、一宮市の北西部に広がる木曽川およびその支流によって形成された自然堤防およびその後背湿地に位置する。池田遺跡は古墳時代から中世、沖遺跡は古代から中世の遺跡としてすでに紹介した。今回は従来の調査で未確認であった戦国期を中心に紹介する。

池田遺跡は、南北ほぼ一町(約100m)で区画する溝が並行して3条検出された。溝の中から大窯Ⅰ期(15C末～16C初)の天目茶碗・播鉢などが出土した。特に写真3は区画溝の北西コーナー部分から出土した馬骨で、数頭分まとまって出土しており、人為的に埋めた可能性が高い。また、馬骨の出土した付近を再掘削した土坑からは、「天

文8年(1539)」銘の木簡や五輪塔なども出土している。方一町の区画溝の規模から考えて、内部には当時の領主クラスの居館が推定できる。

一方、沖遺跡は池田遺跡に比べ規模が小さく南北両端に約30mの区画溝がやはり3条並行して検出された。遺物は池田遺跡とほぼ同じ大窯Ⅰ期の天目茶碗・播鉢などが出土した。

今回の調査により、両遺跡から戦国期の居館と思われる遺構が確認された。しかし、両者とも区画溝内部の構築物は未確認である。今後の調査に期待される。

(調査研究員 永井宏幸)

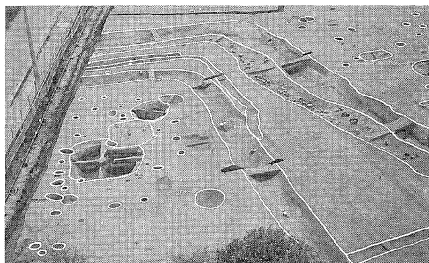


写真1

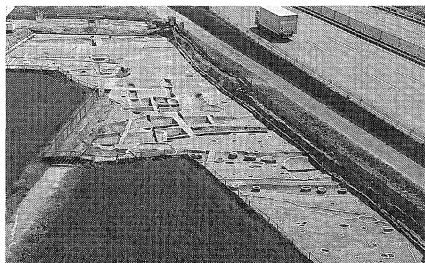


写真2

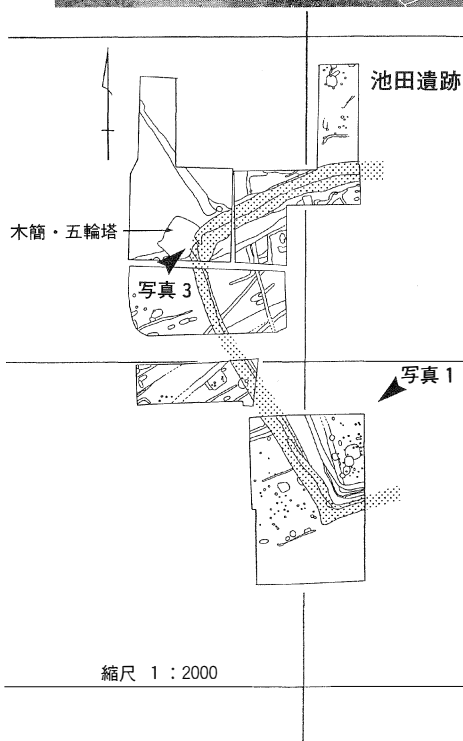
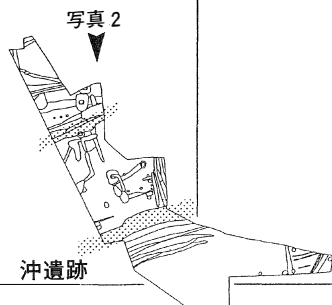


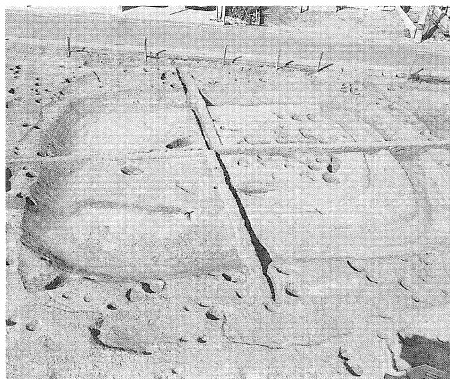
写真3



◀ 市町村だより ▶

市道遺跡

豊橋市

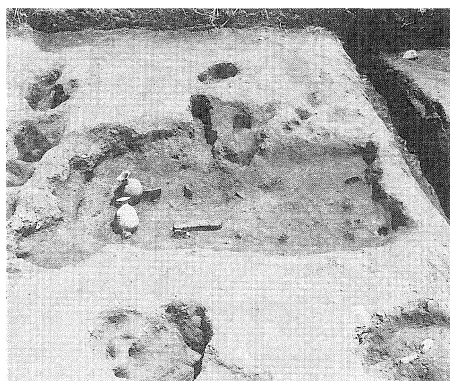


今回の調査は南側区画内3箇所で行ない、区画中央部から奈良～平安時代の金堂基壇跡が検出されている。基壇は中世の雨落溝によって壊され正確な規模は不明だが、周囲に巡らされた雨落溝より約13m×9m以内の長方形であったものと推定される。金堂の西側には瓦塔を祭ったと考えられる建物跡も見つかっている。また、金堂の四方には、多量の瓦を投棄した廃棄土壌が巡らされていた。遺物には仏像の螺髪、瓦塔などの寺院関係のものが出土し、南側区画は寺院であったことが確定となった。これら調査結果から、寺院は平安時代中葉に倒壊した後、金堂と講堂だけは同位置に再建され中世まで続いたようである。そして、堀で囲まれた区画自体も3回規模が替えられていたことが判明した。さて、この寺院の性格だが、郡司の中でも最高位の大領の氏寺と推定される。

(豊橋市教育委員会 岩瀬彰利)

古天王遺跡

小牧市



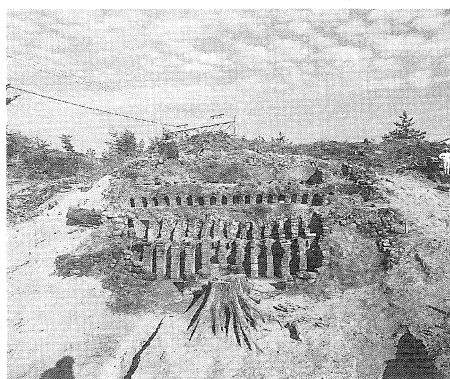
本遺跡は、小牧山北方約1kmの台地上に位置する、縄文・古墳・平安・近世の複合遺跡である。今回の調査は、市道新設に伴う第1次調査で、遺跡の北端部分約600㎡を調査した。遺跡は、全体に削平を受けているが、多数の遺構・遺物を検出した。

注目されるのは、単独で検出された平安時代の上墳墓（木棺墓）である。長さ2.15m、幅1.25m、深さ0.35mの平面長方形の土壌内に、鉄釘が長方形に分布し、長さ1.6m、幅0.55mの木棺が置かれていたと推定される。木棺内部には10世紀前半の灰釉陶器の長頸瓶、手付瓶、碗各1個体、鉄板1個体が副葬されていた。鉄板は、長さ32cm、幅8cmで、発見当初は墓誌と推定しX線撮影を試みたが、文字等は刻まれていない。平安時代の鉄板の副葬は、きわめてまれで、今後の古代墓制研究に貴重な資料を提供した。

(小牧市教育委員会 中嶋 隆)

赤重窯跡

瀬戸市



本遺跡は、瀬戸市の南西部菱野町に位置し、矢田川の支流である井林川の東側丘陵上の西側斜面に標高105mを測って立地する。調査はマンション建設に伴う事前調査として窯体周辺350㎡を対象に実施し、「古窯(こがま)」と呼ばれる小型の連房式登窯1基を検出した。窯体は天井部の崩落をみるが、各房の床面及び側壁下部等は良好な状態で残存しており、最低3回の大規模な改修が確認できた。1次窯では胴木間(燃焼室)、捨間、そして焼成室4房からなり、その後焼成室のみ減少し、2次窯で3房、3・4次窯で2房となる。遺物は白磁、染付磁器等の碗・皿類の製品に加え、エンゴロ、輪ドチ、クレ等の窯道具である。

本窯の操業時期は遺物から19世紀後半と考えられるが、市域における同時期の遺跡の調査例は少なく、近代瀬戸窯での磁器生産を語る上で重要な遺跡である。

(財瀬戸市埋蔵文化財センター 青木 修)

発掘調査ニュース

＝多孔銅鏃出土＝（一宮市田所遺跡）

田所遺跡は、一宮市田所、国道22号線のすぐ東隣りに位置しています。一昨年より、継続して発掘調査が行われています。

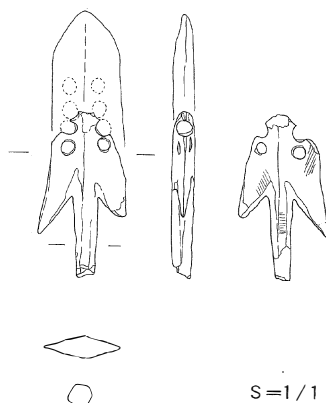
ここで紹介する多孔銅鏃は、94B a 区北部の、南北に延びる幅2m前後の浅い溝の中から、中世陶器片に混って出土しました。上半分が欠損しており、腐食も進み、遺存状態は決してよくありませんでした。残存部は、長さ2.7cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmで、左右対称に2対の穴があいています。これまでの類例から見て、本来の長さは4cmほどで、8つの穴が開いていたものと予想されます。

この多孔銅鏃は、弥生時代の終末期から古墳時代初頭にかけて、伊勢湾沿岸を中心に分布する特殊な銅鏃です。これまでに21遺跡から27点しか出土していません。一遺跡から複数出土した例が少ないことから、その用途は、石鏃のように狩猟などに使用されたものではなく、何ら

かのシンボリックなものであったようです。

伊勢湾沿岸以外では、滋賀県で3点、長野県で3点出土したほか、静岡県、神奈川県、奈良県、和歌山県でそれぞれ1点の出土が確認されています。この分布の状況から、伊勢湾沿岸から、各地にもたらされていたものと考えられます。今後、さらに調査事例が増えることにより、分布の経路が具体的に明らかになるものと思われます。

（調査研究員 増沢 徹）



基礎研修会・専門研修会

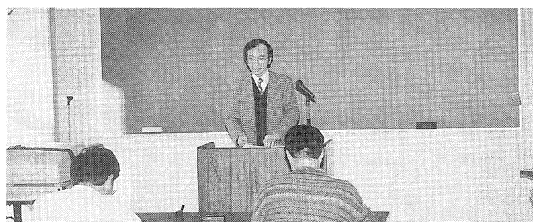
◆◆基礎研修会◆◆

10月6日(木)、7日(金)の2日間、愛知県埋蔵文化財調査センターと(財)愛知県埋蔵文化財センター葉栗事務所にて市町村埋文担当者を中心に39名の参加者を得て開催されました。初日は愛知県埋文調査センター明壁正毅所長の「文化財保護の精神」、愛知県教委文化財課磯谷和明教育主事の「埋蔵文化財とは何か」、(財)愛知県埋文センター中川真文調査課長の「埋蔵文化財調査の実践」の3つの講義が行われ、埋蔵文化財に関する基礎知識を深めることができました。2日目は(財)愛知県埋文センター宮腰健司・服部俊之調査研究員による「土層転写」の現地指導が行われました。

◆◆専門研修会◆◆

11月10日(木)、11日(金)の2日間、市町村埋文担当職員等47名が「中世の集落研究」をテーマに研鑽を深めました。(財)埋文センターが調査している田所遺跡の事例報告を高橋信明課長補佐と赤塚次郎調査研究員が行った後、広瀬和雄氏(大阪府教委文化財保護課)の「畿内の中

世村落」、橋口定志氏(東京都豊島区教委文化財係)の「東国の中世居館」、下村信博氏(名古屋市博物館)の「文献史料からみる中世集落」の講義を受け、実際に発掘調査中の田所遺跡の見学をしました。関東及び関西の中世集落のお話をうかがい、調査事例が増加しつつある愛知県においても、文献史料を踏まえて、緻密なデータ集積をしなければならないことを考えさせられた有意義な研修でありました。



埋蔵文化財愛知 No.39

発行 平成6年12月20日
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター
〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田
字野方802番24
TEL 0567-67-4161~4163
印刷 株式会社 クイックス